

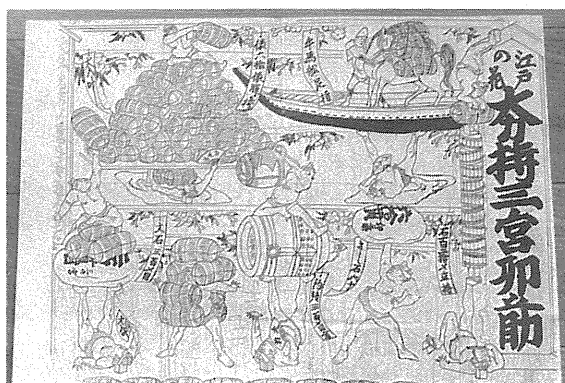


『力石』をたずねて

古いものが失われていく時代である。力石もその例外ではなく、労働の機械化・合理化にともない急速に忘れ去られ、記録も残っていないのが現状である。いま、神社の境内や雑草の中にひっそりと息づいている力石の意味を知り、これを後世に伝えていくことが必要ではなかろうか。

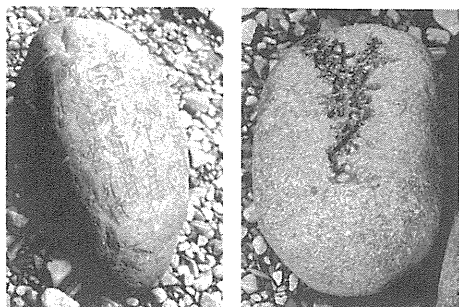
魚吹八幡神社の力石（網干区宮内）

国旗掲揚台の下に保管されている。河原石が多く、中に持ちあげた人の名が刻まれたものがある。



三ノ宮卯之助の興業広告

力石を持ちあげたのは神社周辺の人々であるが、「江戸力者 三ノ宮卯之助」の名が見えるのが注目される。三ノ宮卯之助は埼玉県越谷市三野宮の向佐野で生まれ、嘉永7年（1854）47才で亡くなった。三ノ宮卯之助が持ちあげた名入の力石は越谷市久伊豆神社、東京都深川八幡神社、鎌倉市鶴岡八幡宮、長野県諏訪神社等にある。天保7年（1836）の江戸力持番付に「関脇三ノ宮卯之助」とある。当時の興業広告に「江戸力持 三ノ宮卯之助」「江戸の花 大力持三ノ宮卯之助」とあることから、仲間と一座を組んで力持ちを見せ物として諸国を興業し、人気をあつめていたことが知られる。



魚吹八幡神社の力石

〔刻字〕①「垣内 佐一郎持」「新宮 卯吉持」「江戸力者 三ノ宮卯之助曲持」「浜田 祐三郎持」「津市場村 津田新七持」、②「マツオ」「奉納 □□久造」
〔大きさ〕①75×40、②67×40、③46×28、④65×33、⑤63×42、⑥61×33（単位cm）
〔形状〕①・④卵円形、②・③・⑤・⑥楕円形
〔重量〕不明 〔材質〕②・④花崗岩

天満 神明神社の力石（大津区天満）

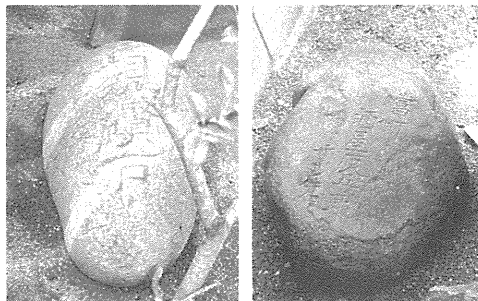
神明神社の境内に放置されている。

〔刻字〕①「新礮石」「明治11寅9月」「当町三木儀八持之、発起朋友」、②「奉納 河野通久持之」、「曾孫通泰納之」、③「当町 酒屋辰五郎」「サシ石」

〔重量〕不明

〔大きさ〕①67×40、②67×35、③55×36、④67×35

〔形状〕①卵形、②俵形、③・④・⑤楕円形



天満神明神社の力石

上野 八幡宮の力石 (船津町上野)

境内と鳥居の脇に保管されている。古老の言によると戦前まで村の若衆が正月・盆・秋祭・農閑期といった時に集まって、力競べにこの力石を用いていたとのことである。

〔大きさ〕 ①60×32、 ②50×38、 ③45×30、
④47×30、 ⑤60×30、 ⑥40×34

〔重量〕 5・6・7・8・9斗相当

〔形状〕 ①卵円形、 ②・③・④・⑤楕円形、 ⑥佞形

重量を米の容量の「斗」で表わしている。このことは力持ちが米俵を担ぐことからきていることを示している。境内に力石に関する説明板が立てられ、保存理由が記されている。



上野八幡宮の力石置場

力石	缺失	4斗相当	16貫 (60kg)	7斗相当	28貫 (105kg)
		5斗相当	20貫 (75kg)	8斗相当	32貫 (120kg)
		6斗相当	24貫 (90kg)	9斗相当	36貫 (135kg)

力石は昔から農山漁村を始め都会の地にも設備せられ若中連が力量試練の為に常に親しまれたものである。時代の変遷と共に其の事が自然衰頹し、多くは破棄又は失損せられた。

然るに本村では之に関心の有志多く為に其大部分を保存せられてきたことは正に村の至宝であり誇りである。惟ふに重荷を操縦し運搬するには単なる力のみでは不可能である。即ち充分に涵養せられた余力とそれに伴ふ所謂「こつ」の練技体得によって始めて可能である。然り当時の郷土の若中連は常に宿老先輩の指導の下に熱心に競力練技したものであり、之によってまた力強き郷土愛を培われたのである。茲に於て現在及び将来の青年に□□する所は□□省み新しきに考へ剛建質実体に力倆を練成し心に智徳を修養し先輩に論□することなく以て郷土の産業並に文化に寄与されんことである。茲に此の青年教育中実に宝物的貴重資料である力石を永久に散逸より防ぐ為に定置保存する所以である。

上野区長・□□□□



栗山の力石

栗山の力石 (姫路市栗山)

栗山公民館の横に放置されている。「平兵衛の振さし石」と呼ばれている佞形の河原石である。両手をこの石の長径にかけ、前後に振りながら持ちあげたので「振さし石」という名前があるといわれている。

〔刻字〕「片手留」「嘉永元年申年 当町」「平兵衛」

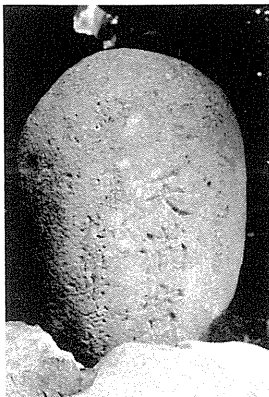
〔大きさ〕 55×35 〔重量〕 不明 〔形状〕 佞形

恵美酒 天満神社の力石 (飾磨区恵美酒)

本殿東側に立てて保存されている。〔大きさ〕 75×55 〔重量〕 不明

〔刻字〕「奉納 天満宮」「天保11年 寄進」「大浜岩吉持」

〔形状〕 小判形 〔材質〕 凝灰岩



恵美酒天満神社の力石



須加天満神社の力石

須加 天満神社の力石 (飾磨区須加)

境内に立てて保存されている。刻字に見られる大浜は恵美酒天満神社の力石に刻まれている東堀と同じ野田川の川口の村で、船乗りや沖仲仕など海運に従事する人々や漁師が多く居住していたところで、力持ち連中が多く集まり、彼等によって奉納されたのだろう。

〔刻字〕「奉納 天満宮」「天保13寅年」「一生一代 播磨国 大浜 岩吉持之」〔大きさ〕

100×47 〔形状〕 小判形 〔材質〕 凝灰岩

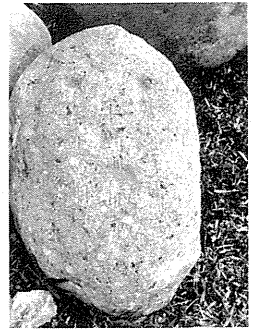
北平野 大歳神社の力石（姫路市北平野）

境内に保存されている。刻字にある平野川は宮相撲の四股名で、広峯神社その他の奉納相撲に出かけた。平野川儀蔵は岩沢家に生まれ婚姻により柳内氏と改名。昭和10年(1935) 68才でなくなった。

〔刻字〕①「関羽石」「明治25年吉春」「当所平野川儀蔵」「45貫目」 ②「平野川儀蔵」「明治25年吉日」「58目目」


〔重量〕①45貫(168.75kg) ②58貫(217.5kg)

〔形状〕①俵形、②卵円形、③④⑤⑥楕円形



北平野 大歳神社の力石


北平野には「力石人名簿」が保管されており、当時の「力持ち」に参加した青年達の氏名34名が記されている。その中にみられる当村石置場は大歳神社の境内である。



明治27年 5月 力石人名簿 当村 平野川儀蔵 廿七歳春

明治27年 5月11日当村石置場ニ於テ、大石ヲ持上ゲ衆人ノ目ヲ驚ス、是從先ニ他村及ビ他郡他国ノ人民皆平野川有力者タルヲ知ル、於是連中協議ノ上此ノ石ニ名ヲ書シ、壱ツハ広峯神社に奉リ、壱ツハ本村力石置場ニ留メ、古今未曾有ノ大力ヲ賞スルノ余リ後幾百万歳を経ルト雖モ人民皆其有力者タルヲ表スル為ニ斯ク知セル者ナリ矣

明治27年 5月16日 字者・当村小松原軍三郎、石工・舟場中村亀次郎



力石置場

記 池内十太郎、岩沢儀蔵………(以下人名略) 〃34名

1. 人名二冊ヲ書シ 一冊ハ連中ニ置キ 一巻ハ平ノ川ニ送ル

明治27年 5月16日 平野村東垣内 若連中

当村 平野川殿 兵庫県飾東郡城北村大字平野村 平野川 儀蔵携

広峯神社の力石（姫路市広峰山）

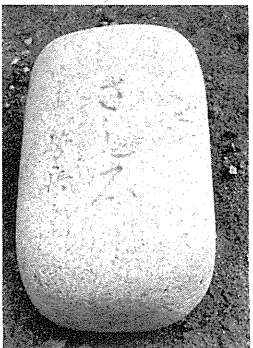
境内に保管されている。①については前述の力石人名簿を参照してほしい。平野川儀蔵名入りの力石はその後大正8年4月18日、仁豊野の小田徳次が持ちあげた。

〔刻字〕①「奉納 力石」「明治27年 5月」「平野村」「平野川儀蔵」、 ②「奉納 さし石」

「納石 平野町」「片手止 芳兵衛」「文久2」

〔大きさ〕①70×36、②53×29 〔重量〕不明

〔形状〕①卵円形、②俵形 〔材質〕①凝灰岩、②花崗岩



広峯神社の力石

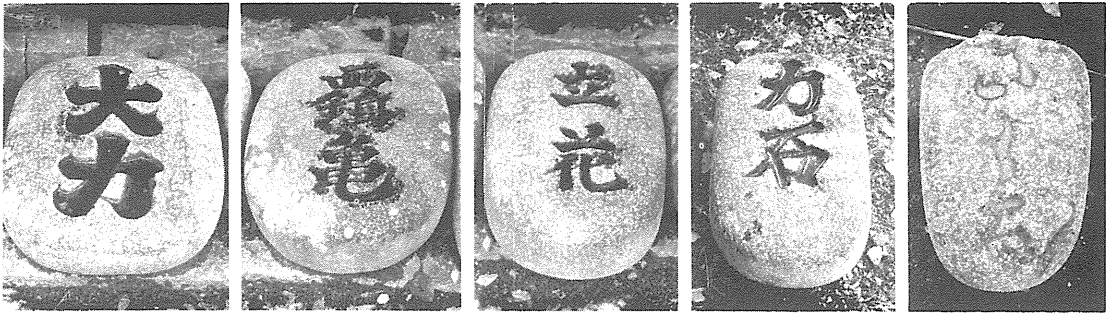
力石は肩にかつぐ方法をとるが、「さし石」は両手で頭上高く差し上げるのが普通である。「芳兵衛」は片手で差し上げたので「片手止」と刻まれている。

姫路の力石（S61.7.31現在）

所在地	数	八幡宮・大津区吉美	3	大歳神社・花田町勅旨	3
魚吹八幡神社・網干区宮内	6	武大神神社・〃平松	2	春日野神社・飾東町塩崎	1
稲荷神社・〃津市場	3	蛭子神社・〃長松	2	大歳神社・豊富町神谷	1
愛宕神社・勝原区朝日谷	2	武大神神社・〃長松	2	八幡宮・船津町上野	6
天満神社・広畑区才	6	神明神社・〃天満	5	大歳神社・北平野	6
早川神社・飾磨区阿成	3	松原八幡神社・白浜	1	広峯神社・広峰山	2
天満神社・〃恵美酒	1	栗山公民館・栗山	1	稲岡神社・青山	3
天満神社・〃須加	1	安田公民館・安田	2	大年神社・六角	2

才 天満神社の力石（広畑区才） 鳥居をくぐるとすぐ右側に並べてある。整形された小判形でいずれも姫路の力石を代表する立派な遺品である。それぞれの力石に刻まれた井上常五郎の人となりについては定かではないが、力石を寄進した人か力持ちの世話人であろう。

〔刻字〕①「才若 大力」「明治16年11月、75メ」「井上常五郎 53歳」「平野川儀蔵肩之上」「明治27年5月 姫路城北平野村有志者記之」、②「羈羈亀」「明治13辰歳」「醬油屋若中」「58メ」「井上常五郎」、③「立花」「明治12卯年」「48メ」「井上常五郎」、④「力石 才村若中」「明治10年丑年10月」「井上常五郎」、⑤「力石 若中」「明治10年丑10月」「井上常五郎」、⑥「さし石」
〔大きさ〕①70×56、②67×52、③65×43、④62×45、⑤62×38、⑥49×31（単位cm）
〔重量〕①75メ（281kg）、②58メ（217.5kg）、③48メ（180kg）〔形状〕小判形〔材質〕花崗岩



才 天満神社の力石

力石について

1. 「力持ち」は江戸時代、江戸を中心に関東各地で行われていたが、やがて日本各地にひろがったといわれ、それに用いられたのが「力石」である。力石を定義づけることは容易ではないが、「神社境内・会所・村境などに置かれ、若者が力だめしにかかえあげたり、豊凶の占いにも用いられた一定重量の大小の小判形・楕円形・卵円形の石」のことを力石と呼んでいる。
2. 力競べに用いられた石には「力石」・「さし石」と呼ばれた二種があり、「さし石」は「力石」よりひとまわり小さい。力石が最高70貫（262.5kg）、さし石は16貫（60kg）ぐらいである。「力石」を持ちあげる方法は、両方の手を力石の長径にかけて胸までかかえ上げ、次いで肩に担ぐ方法が一般的である。馴れている人は薄歯の高下駄をはいたり、一升楯の上に両足を乗せたりして力石を担いだといわれる。「さし石」は胸または肩まで持ちあげた後、両手で頭上高くさしあげるのを常とし、力のある者は片手でさしあげたといわれる。栗山、広峯神社はこの例である。「曲持ち」は身体のどの部分にも触れることなく手だけでさしあげる。魚吹八幡神社の三ノ宮卯之助曲持はこの例である。
3. 力石に紀年銘の刻まれたものとして最も古いものは、東京都江東区志演神社の境内にある寛文4年（1664）のものである。姫路では天保11年（1840）、天保13年（1843）のものが古い。紀年銘の刻まれた力石としては他に嘉永元年（1848）、文久2年（1862）、明治10年（1877）、12年、13年、16年、25年、27年等がある。紀年銘から見ると力石というものによる力持ちの形態が整ってきたのは、姫路では江戸時代後期からで、全国各地の報告例から見てもほぼ同年代である。
4. 残存する力石は整形されたものは少なく、ほとんどが自然石で素朴な玉石が多い。また分布状態は都心部には見られず、海岸地域の農・漁村や港湾地域及び内陸部の農村に多く見られる。このことは力持ちが体力を必要とする人々の体力づくりであり、遊びであり、娯楽であったことを物語っている。

■編集 増田重信（姫路市文化財保護審議会委員）
（姫路市文化財嘱託調査員）